

播種作業と適切な育苗管理が重要です。 良質米生産に向けしっかりと苗づくりを!!

播種作業が始まる時期となりました。1年に1回の播種作業ですので基本に忠実に作業を始めて下さい。4月初旬は特に風の強い日が多く、春先の天候は不安定です。田植時期を逆算し余裕をもって作業を行い、健苗育成に努めましょう。

◎播種

低温等による障害や育苗日数の長期化による老化苗等の問題が生じるため、必要以上に早播きにしない。

| 育苗方法 | 育苗日数(日) | 播種量(g/箱) | |
|---------|---------|----------|------|
| | | 乾 粳 | 催芽粳 |
| 加温出芽稚苗 | 20~25 | 150g | 180g |
| 無加温出芽稚苗 | 20~30 | 150g | 180g |
| 中 苗 | 30~35 | 100g | 125g |

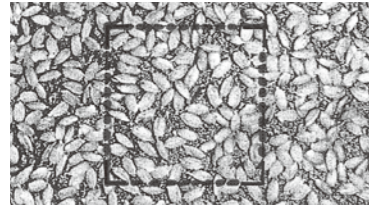
◎育苗期間中の管理

育苗様式別目標値

| 項 目 | 稚 苗 | 中 苗 |
|-------------|----------|----------|
| 草 丈 (cm) | 10~15cm | 13~18cm |
| 第1葉鞘高 (cm) | 3~4cm | 2~3cm |
| 葉 数 (葉) | 2.1~2.5葉 | 3.5~4.0葉 |
| 乾物重(g/100本) | 1.2以上 | 2.1以上 |

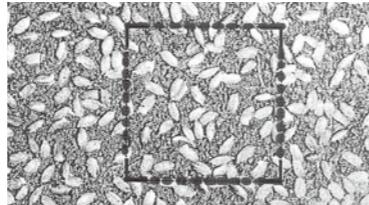
播種/田植えをする日から育苗日数を逆算して実施します

め 播種量の やすの



稚苗

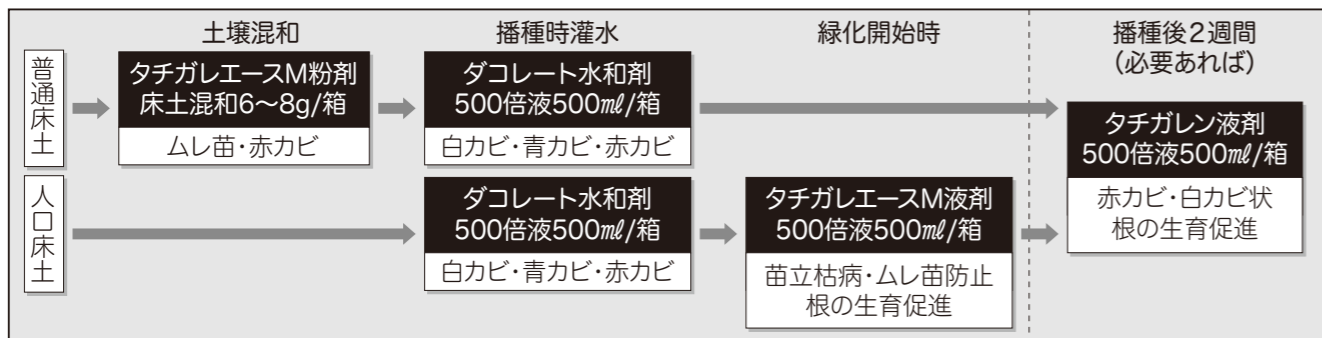
播種量180g
(催芽粳)
(5×5内に
約100粒)
育苗日数20~25日



中苗

播種量120g
(催芽粳)
(5×5内に
約55粒)
育苗日数30~35日

◎育苗病害防除 (JA米)



- ①リゾプス属菌(白カビ)、トリコデルマ属菌(青カビ)、フザリウム属菌(赤カビ)、ピシウム属菌の4種類がある。
- ②発生してからの防除は効果が低いので、予防防除に努める。
- ③床土のPHが高い場合はフザリウム属菌(赤カビ)とピシウム属菌が、PHが低い場合はトリコデルマ属菌(青カビ)が出やすい。
- ④出芽温度が32℃以上になるとリゾプス属菌(白カビ)が多発しやすい。
- ⑤育苗中の低温は、フザリウム属菌(赤カビ)、ピシウム属菌が発生しやすくなるので、そのような場合には予防的にタチガレン液剤を灌注する。
- ⑥ダコレート水和剤とタチガレン液剤との近接灌注(3日以内)は葉害を生ずる場合があるので注意する。
- ⑦細菌性苗腐敗症の発生防止のためにも、出芽温度、催芽温度が**高温(30℃以上)**にならないよう注意する。

※環境保全米はタチガレン粉剤又はタチガレン液剤の1回のみ散布可能となります。

【ダコレート水和剤・タチガレースM液剤・タチガレン液剤】500倍液のつくり方

| 防除箱数 | 薬剤量 (g又はcc) | 水量 (ℓ) | 防除箱数 | 薬剤量 (g又はcc) | 水量 (ℓ) |
|------|-------------|--------|------|-------------|--------|
| 50 | 50 | 25 | 200 | 200 | 100 |
| 100 | 100 | 50 | 300 | 300 | 150 |
| 150 | 150 | 75 | 500 | 500 | 250 |

※使用回数・希釈倍数を確認して下さい。

◎播種後の管理について (新しいビニールは高温傷害に注意して下さい。)

出芽作業

加温出芽

- ・出芽温度は30℃を超えないように(細菌病予防のため)。芽長を約1cmの揃える。

無加温出芽

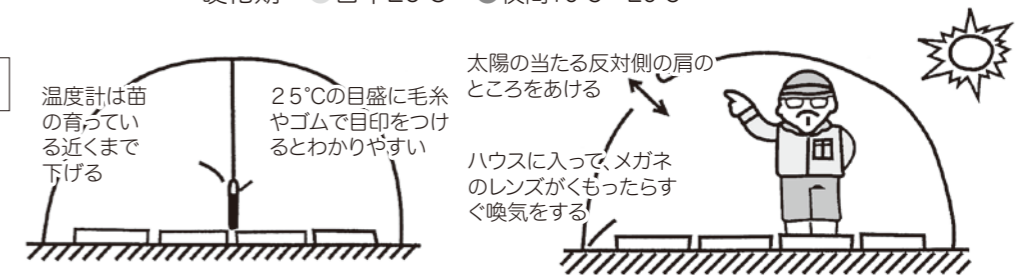
- ・遮光性のあるラプシートやシルバーポリトウなどをべた掛けする。被覆資材の周囲から水分の蒸発を防ぐ。
- ・新しい保温資材を使用する場合は、特性を把握して高温障害等が出ないように留意する。第1葉が展開し、第2葉が抽出し始めた頃に除覆する(緑化まで終了)。
- ・ハウスの換気を行い、床土温度を極力30℃以上にならない(無加温での中苗についても同様の管理)。

緑化作業

ハウス内の温度は?

緑化期：●日中25℃ ●夜間15℃前後(10℃以下にならないように保温。)
注 意：低温等の肌寒いときはハウスを夕方の早いうちに閉めましょう。
硬化期：●日中20℃ ●夜間10℃~20℃

温度管理のめやす



水管理

1日に何回も灌水しますと、苗は常に多くの水を要求するようになり、軟弱徒長や根張りが悪く、病害にかかりやすくなります。育苗の前半は2~3日に1回、中盤以降は1日1回の灌水とし、夕方には育苗箱の表土が軽く乾くように管理しましょう。

◎除塩田の管理について (ほ場整備の1年目作付けを含む。)

●除塩田(3年休耕)等の作付けについて

- 基肥について(基肥一発肥料は使用しないで下さい。)
基本的に無肥料で行って下さい。生育状況を見て追肥等での対応を行って下さい。(砂地等は半分くらい投入)
※高度化成555号(チッソ成分5%)を20kg散布の検討を。
- 耕うん作業について
除塩後の水田は稲株などがいないため固い土となり1回の砕土では難しいと思われるので、ゆっくり土が細くなるよう仕上げして下さい。
- 代掻き作業について
耕うん同様に、土壌が今までとは異なって思ったように仕上がりに難しい事が想定されます。
十分に水を入れてから代掻きを行わないと、トラクターのタイヤの跡が残ったり、休耕していたため今まで以上に深くなったりします。雑草の発生を抑えるためにも、耕うん作業と併せゆっくり行って下さい。
- 田植えについて
倒伏軽減のため栽植密度は可能な限り疎植で60株又は50株程度で行って下さい。植付本数は3~4本くらいにし、大苗にしないようにして下さい。
- 除草剤散布について
2年休耕している場合、今まで以上の雑草の発生が想定されます。初期除草剤+初中期一発剤の体系処理をおすすめします。

プール育苗法

【プール育苗法とは】

プール育苗法とは、パイプハウス等の施設内に遮光性のビニールフィルムを敷いて作った簡易水槽（プール）を用い、必要に応じてこの中に水を入れ、水耕または水苗代に近い状態で箱育苗を行う方法です。

<メリット>

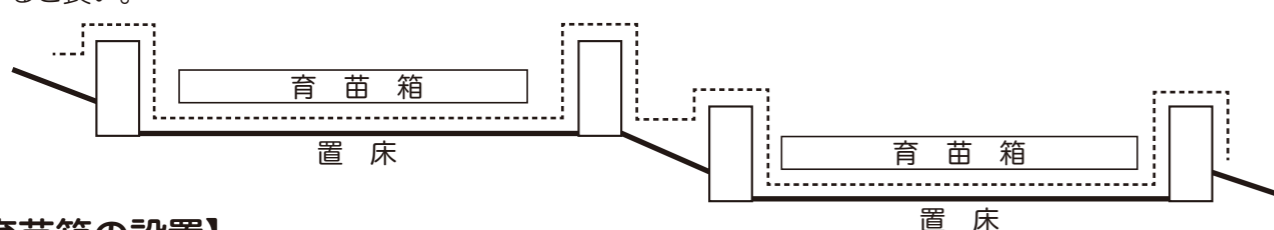
- ・灌水や温度管理の作業が大幅に短縮され、追肥作業の省力化も図れる。
- ・常時湛水状態を保つことにより、もみ枯細菌病・苗立枯細菌病の発病が抑制される。
- ・野菜を作付したハウスにおいても、生育障害を起こす心配がない。

<デメリット>

- ・温度管理によっては苗が伸び易い。
- ・根張りが良すぎて苗箱から苗が剥がしにくくなる場合がある。
- ・移植前の落水が遅れると苗が重く、運搬が重労働となる場合がある。

【プールの準備】

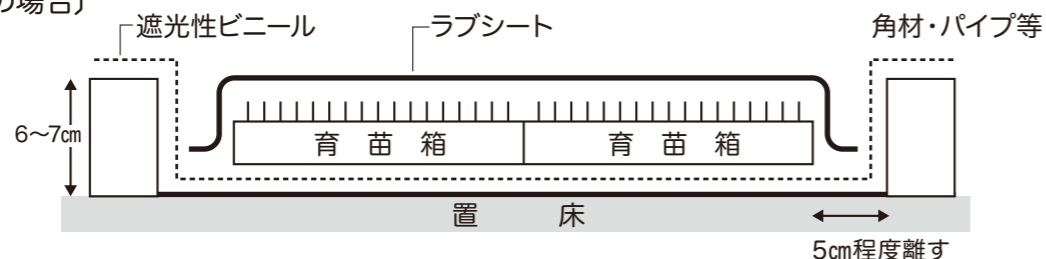
- 育苗箱の置床を水準器を用いて水平にし、この周囲を角材やパイプを用いて6～7cm高くします。
- 置床にやや厚めの遮光性ビニール等を敷きます。遮光性のビニールを使用するのはスギナ等の雑草の発生を抑制するためです。
- プール内の1～2カ所に水位調整ができるように水尻を作っておきます。
- 設置場所が水平にし難いところや奥行きのあるハウスの場合は、図のように段を作り複数のプールにすると良い。



【育苗箱の設置】

- 加温出芽：出芽させた箱をプール内に並べ、ラプシートを被覆して緑化します。
- 無加温出芽：播種・覆土した箱をプール内に並べ、その上からシルバーポリトウのような遮光性のある資材をべた張りし、1葉目が出始めたら除覆します。
- 箱下への根の貫通防止：箱下へ根が貫通しにくくなるように敷紙（カルネッコ等）を敷くと、移植時に箱から苗を取り出し易くなります。

（加温出芽の場合）

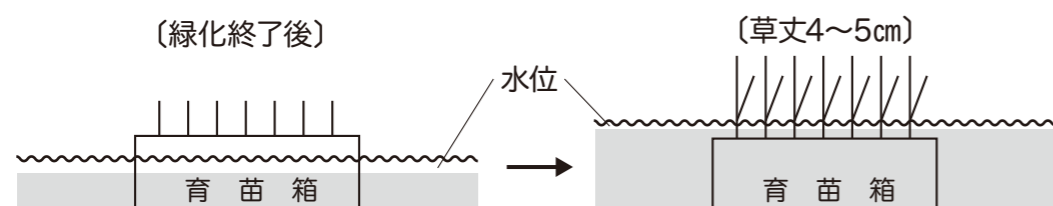


【水管理】

○プールに水を入れ始める時期は慣行の1回目の時期と同じ緑化が終了した頃が目安となります。

注：出芽する前には絶対にプールに水を入れないようにします。

- 最初の水の量は育苗箱の高さの3分の2程度（床土の高さ）とします。
- 苗がある程度育成し、水没する心配がなくなったら、育苗箱の上まで水位を高くします。
- プール内の水がなくなったら再び水を入れます。水を入れる間隔は気象条件により異なりますが、概ね4～7日。細菌性の病害対策であれば出芽後、常時床土の上まで湛水しておきます。
- 移植2日前になったら落水し、運搬が容易（水分を多く含んでいるととても重い）となるようにします。



【温度管理】

- プールに水を入れ始めたら、原則として昼夜ともにサイドビニールを開放し、徒長を防ぐため慣行より低めの温度（15～25℃）で管理します。
- 夜間に低温が予想される場合はサイドビニールを下げ、水を箱上まで湛水状態とします。保温マット等の被覆は不要となります。

【追肥作業】

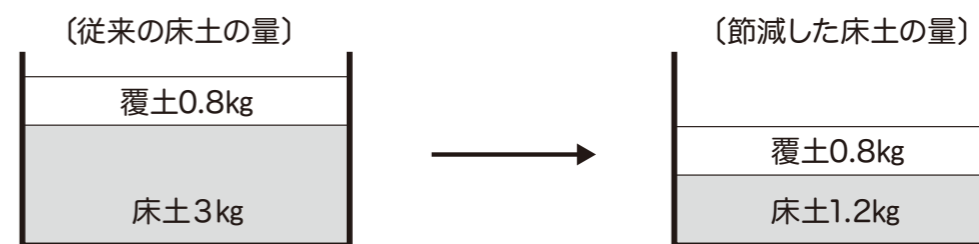
- 追肥の時期は稚苗で1.5葉期を目安とします。
- 液肥（液肥2号、N:10%）を1箱当たり窒素成分で1g以内とし、300倍程度（200～500倍）に希釈してプール内に流し込みます。
- 追肥の前日には落水しておき、追肥溶液の水位は覆土の高さまでとします。
- 追肥後プール内水位が半分程度になったら水を追加し、肥料による濃度障害を防ぐようにします。

【プール育苗の注意事項】

- 慣行の育苗法と比較して苗が伸びやすいので、ハウス内の温度が高温にならないように注意が必要です。最低気温が5℃以上になるときは早い時間から換気します。
- プール内に育苗箱を並べる際にビニールを傷つけないように注意しましょう。

プール育苗の床土量の節減

- プール育苗では1箱当たりの床土量を慣行育苗より少なくすることができます。ただし、覆土の量は従来どおりとなります。
- 肥料入りの人口培土では床土量が少なくなる分肥料も少なくなるので、早めの追肥（1～1.5葉期）が必要となります。
- 床土の灌水量も約半分となるので、播種時の灌水量を調節する必要があります。
- 移植前1～2日前には落水しますが、床土量が少なく乾燥により葉がしおれやすくなるので注意が必要となります。



※出芽する前までの管理（入水前）は高温障害等に気をつけて下さい。

苗の生育不良や相談はJAへご連絡ください。
出向いて診断を行います。
又、除塩田については、個別に事情が異なりますので、
JAへご相談ください。

（営農企画課 TEL 022-384-2392）

